

肺転移巣が出現したため、 ^{131}I による治療目的にて当院放射線科を受診した。 ^{131}I による残存甲状腺の ablation を施行後、トレーサ量による ^{131}I 全身スキャンを行ったが肺転移巣に ^{131}I の摂取を認めなかった、 T_4 より T_3 に変更して、血中 TSH $0.1 \mu\text{U/ml}$ 以下になるよう抑制療法を続けたところ、 T_3 服用開始後 2 か月で多発肺転移巣は縮小傾向を示し、6 か月後では著明な肺転移巣縮小を認めた。胸部 X 線上の縮小率は、33–76% であった。CT 上、各転移巣で縮小率にバラツキがみられたが、肺転移巣縮小は明らかであった。CT 上新たな転移巣を示した病巣は認めなかった。血中サイログロブリン値は 80 より 25 ng/ml に下降した。 T_3 服用開始後 4 年 6 か月経過した現在、病巣の進展を見ない。分化型甲状腺癌に対する T_3 による TSH 抑制療法は予後を改善するかもしれない。

25. 上咽頭腫瘍の治療効果判定における ^{201}Tl SPECT の有用性

戸川 貴史 油井 信春 木下富士美
(千葉がんセ・核)
幡野 和男 (同・放治)
小村 健 (同・頭頸)
柳沢 正道 (千葉県鶴舞病院・放)

組織学的に確診の得られた 24 例の上咽頭腫瘍の放射線・化学療法の前後に MRI および ^{201}Tl SPECT を行い、治療効果判定に ^{201}Tl SPECT が有用か否か検討した。治療効果判定は MRI 所見に基づき CR, PR に分類した。 ^{201}Tl SPECT では治療終了時に集積残存のあるものを PR、完全に集積が消失したものを CR と判定した。治療直後、MRI と ^{201}Tl SPECT がともに CR であったものは 9 例、ともに PR であったものは 6 例であり、15 例では効果判定結果が一致した。しかし、他の 9 例では、MRI が PR であったにもかかわらず、 ^{201}Tl SPECT は CR であり、さらに follow-up (平均 10.6 か月) を行くと、この 9 例中 5 例では 6 か月後の MRI が CR となった。

26. タリウムシンチグラフィで興味深い所見を示した食道平滑筋腫の一例

川本 雅美 (神奈川県循環器呼吸器病セ・放)
池上 匡 (横浜市大病院・放)

症例：38 歳男性。1997 年 1 月頃より胸部不快感が出現し近医を受診。上部消化管造影にて食道に圧排像が認められ、縦隔腫瘍の疑いで、当院紹介となる。CT で縦隔中心部に食道を右方へ圧排する腫瘍が認められた。石灰化や脂肪成分は明らかではなかった。MRI では、T1 強調画像で低信号、T2 強調画像では軽度の高信号を示し、比較的均一な増強効果が認められた。1 週間で著しく増大し、悪性腫瘍を疑った。ガリウムシンチグラフィではこの腫瘍に対する集積は全く認められなかった。タリウムシンチグラフィでは、この腫瘍に一致して早期・後期像ともに明瞭な集積が認められた (ER 1.38, DR 2.59, RI 88)。腫瘍摘出術が行われ、病理組織診断は食道平滑筋腫であった。

27. 肺腫瘍性疾患良悪性鑑別における ^{201}Tl SPECT, ^{67}Ga SPECT の比較

戸川 貴史 油井 信春 木下富士美
(千葉がんセ・核)
柳沢 正道 (千葉県鶴舞病院・放)

肺腫瘍性疾患 127 例 128 病巣について ^{201}Tl SPECT, ^{67}Ga SPECT を行い、それぞれの正診度および両 SPECT における半定量的パラメータを比較し、良悪性鑑別にどのパラメータが有用か検討した。127 例中肺癌は 108 例、109 病巣で、すべて切除例であり、他の 19 例、19 病巣は、臨床経過 (9 例)、手術または組織学的検索 (10 例) で良性と判定された。タリウムでは True Positive (TP) 103, False Negative (FN) 6, True Negative (TN) 2, False Positive (FP) 17 であった。これに対して、ガリウムでは TP 77, FN 32, TN 13, FP 6 であった。6 種類の半定量的パラメータのうち DR, RI, Ga ratio では良悪性群間で有意差を認め、DR, RI, Ga ratio が良悪性の鑑別に有用であった。